

二代目 ものがたり

vol.7

紡いでいく

石和こどもクリニック 院長 石 和 翔

当院はだんご三兄弟が一世風靡した1999年8月に、現在の大分市羽屋に父が開院致しました。自身は県外の全寮制の高校に在籍していたこともあり、あまり当時の記憶はありませんが、開院当初のクリニックの写真には今では想像もつかない長閑な田園風景が広がっております。

私は2008年に大分医科大学(現大分大学)を卒業後、関西(神戸大学、済生会兵庫県病院)を経て主に東京(日本赤十字社医療センター本社、国立成育医療研究センター)にて新生児科医・小児科医として従事して参りました。当時は主に集中治療室にて、先天性心疾患を患うお子さんの集学的治療や、臓器移植(生体腎移植/献腎移植)医療に明け暮れる日々でした。2021年4月に大分に帰郷し、1年間の大分大学医学部附属病院勤務を経て、2022年4月より石和こどもクリニックの診療に携わるようになりました。ちょうど新型コロナウイルス感染症が世界を一変させた2年間で父と2人で診療し、2024年4月からは当院の院長として1診体制で日々診療しております。



旧クリニック



この原稿執筆の機会は自身の半生を振り返る機会にもなりました。父は幼少期からあまりとやかく言わない人であったように思います。医師になること、小児科医になること、継承することも含め何も言われたことはありません。ただ、同じ屋根の下で過ごした15年間で、自身に多大な影響を与えたことは言うまでもありません。学生時代には、学内実習で行く先々で「石和俊先生の息子さんね」、時には父の名前で呼ばれることもあり、当時はそれを不自由に感じることも多々ありました。「自由」と「挑戦」を掲げて、

卒後すぐに県外で就職した自分ですが、地方から首都圏に集まった多くの同志と切磋琢磨し、気付けば小児科医となり、そして大分に帰ってきた現在はクリニックを継承しております。振り返ると、その根底には当時からそれとなく感じていた父の医師として働く姿への憧れと、一方で自身の確固たるアイデンティティを確立したい気持ちがあったのだと思います。

先日、途切れることのない外来に勤しんでいたところ、自身の息子が診察室に顔を覗かせる場面がありました。ふと息子の姿に、同じように父を訪ねていた約20年前の自身を重ね、これまであまり想像できなかった、当時の父の心境や、あったであろう苦労に思いを馳せました。懐かしいような少し寂しいような得体のしれない感覚と共に、当時父が立ったスタートラインに自身が立っているような感覚を覚えました。1999年8月、父に見えていた景色はどんなものだったのだろう。2025年4月には多くの方のお力添えもあり、新クリニックが現在の場所に完成予定です。小児医療への貢献を心に決めたときの純粋な気持ちを忘れぬよう、これまでの全ての経験が無駄にならぬよう、いくつになっても挑戦する気持ちを抱きながら、(たまに父への感謝の気持ちも抱きつつ)、自分なりの「石和こどもクリニック」を紡いでいきたいと思います。



新クリニック

